

## ラオスの健康課題と研究能力強化のあゆみ ～ラオス国民健康研究フォーラムをとおして～

国立国際医療研究センター 国際医療協力局

人材開発部 研修課 伊藤 智朗

2019年10月にラオス・ビエンチャンで開催された国民健康研究フォーラム（NHRF）へ出席したので、近年のラオスの保健医療の動きと、国民健康研究フォーラムを中心とした我が国とラオスとの研究協力について振り返ってみる。

ラオスは日本の本州と同じ国土面積にわずかに668万人の国民が生活しており、首都ビエンチャンの人口は2015年で82万人である。国民の約3分の2は山岳地域に居住して主に農業を営んでいる。ラオスは着実な経済発展を遂げているものの、一人当たりGDPは2017年で2,570米ドル（IMF）であり、急速な経済的発展がすすむ東南アジア諸国のなかでは、後発開発途上国に分類されている国である。また、いまだ農村部のインフラ整備は不十分であり、水道、下水、道路などにおいて都市部と農村部の差は大きい国である。

そのため、我が国をはじめ、国際的な研究者にとって、ラオスは寄生虫など熱帯医学や保健・衛生分野の重要な研究フィールドとして考えられ、様々な分野の研究が実施されてきた。筆者の所属する国立国際医療研究センター（NCGM）もラオスに海外拠点を持ち、研究事業を継続的に行っている。今回、筆者がNHRFにて発表した「ラオス Bolikhamsai 県における慢性NCD診断・管理の現状とその経済的負担状況」も、NCGM海外拠点を活用し、実施した研究の一つである。

ラオスにおいては2000年代前半より医学・公衆衛生分野における、ラオス自身の研究能力の強化が政策として求められ、それを反映させる形で2007年から毎年、NHRFを開催している。NHRFは、ラオスの熱帯医学分野、公衆衛生分野の中心的組織であるラオス熱帯公衆衛生研究所（旧ラオス国立公衆

衛生研究所）を中心に運営され、2日間にわたり、ラオス国内の研究者はもちろん、我が国のラオスをテーマに研究を行っている研究者、タイなど周辺国、欧米などの研究者が研究成果を発表し、議論する場となっている。また、近年は我が国のサポートにて日本で学位取得、研究を行っているラオスの将来を担うラオス人若手研究者の発表も研究フォーラムにおいて盛んに行われている。NHRFは本年度で13回目であるが、初期よりラオスの研究能力強化のために、我が国の大学・関係機関等が運営をサポートしている。

NHRFをサポートしている我が国の研究者グループとしてLao Japan Consortium for Health Researchがあげられる。このConsortiumは2003年に我が国



ラオス熱帯公衆衛生研究所による住民調査の様子



国民健康研究フォーラム（NHRF）の様子



のラオスにて研究を行う研究者たちで結成されたグループである。Consortiumでは日本人研究者間での有益な情報交換の場、共同研究の実施のきっかけとなり、毎年、ConsortiumのメンバーがNHRFに積極的に参加し、ラオスにおける健康政策の計画と策定のための活動から学んだ研究結果と教訓を広めている。

そのように我が国とのつながりも深いNHRFであるが、ここで発表されているテーマの多くはその時々ラオスにおける重要課題を反映していると思われる。第13回目となる今回の演題をいくつか紹介しておく。まず、筆者が発表した「ラオス Bolikhamsai 県における慢性NCD診断・管理の現状とその経済的負担状況」は、ラオス熱帯公衆衛生研究所とともに2019年2月に実施した、住民のhealth seeking behaviorの調査に基づき、ラオスの地方における高血圧・糖尿病等慢性疾患の診断・管理・経済的負担の現状に関して調査した結果である。ラオスにおいてはUniversal Health Coverage(UHC)達成のため、2016年より国民皆保険制度をめざし、ターゲット県内の公的医療機関における医療費の支払いを定額とする制度を開始している。調査したBlikahmsai県は2016年よりその制度が導入された県であり、その環境下での慢性疾患の経済的負担も含めた現状を調査した。結果としては慢性疾患患者の8割以上の公的医療機関での支払いは保険制度で定められた低額に抑えられているものの、交通費やその他の機関への支払等をあわせた慢性疾患治療・管理のための総費用は、多くの家庭で経済的破綻を

きたす危険があるレベルを超えている結果となった。このような慢性疾患はラオスのような経済成長している国はもちろん、近年のグローバルヘルスの分野で重要な課題であり、慢性疾患の管理をふくめ、どのようにしてUHCを達成するか、増加する医療費の問題もあわせて考えていく必要がある。ラオスでの研究分野においても、慢性疾患の管理方法や、経済的負担をテーマにした研究がより重要視されるのではないと思われる。

また、近年、ラオスにおいて「医療の質」の向上が重要な課題となっていることを反映する形で、病院の質の向上にとりくむ活動の紹介の演題も多く見られた。グローバルヘルスにおいては、以前より質の高い、患者中心の保健医療サービスの提供の重要性が唱えられている。特に、経済発展に伴い、より高度な医療提供に取り組み始めた国においては、医療事故などのリスクも増加している。例えば、ラオスの隣国であるベトナムでは1日に8名の死亡者を出す人工透析に関する医療事故が発生するなど、医療サービスが患者の健康を害する実態が問題となっている。いかにしてより安全で質の高い医療を提供するかは、これからのラオスにとっても重要な課題であると考えられているのであろう。

一方で、タイ肝吸虫の疫学や対策に関するリサーチの演題も多く発表されており、ラオスにおいては依然、特に農村部において、寄生虫対策はラオスにおける重要な課題であることが実感された。これら第13回NHRFにて発表された演題を振り返ってみると、ラオスにおいては依然、感染性疾患が重要な

健康課題であると同時に成人病など非感染性疾患の両者による、いわゆる二重負荷にさらされている現状が理解できる。

グローバルヘルスにおいては、直接的なインパクトを求める事業が注目される傾向があるが、NHRFのように研究分野を活性化させる取り組みは、中長期的な視野にたつて、自国の研究者の育成につながり、国造りの土台を形成するにあたり重要な取り組みの一つであると思われる。



JAPN CONSRTIAMの会合

